



秋刀魚の

皿

川崎ゆきお

何かをするとき、きっかけとなるものがある。それが先に来る。これにはそれなりの理由があり、動機がある。それをしないといけないとか、今、それをやれば、あとで楽になるとか。当然仕事などでは、もっと細々とした作業があり、行程やスケジュールが先に決まっている場合が多いだろう。

ただ、自分の意志で、これをやろう、あれをやろうと考えることもある。かなり考えた末に、いざ実行になると、とたんに躊躇してしまうこともある。

「それは、また次の機会にやろう」と、作田はいつも先延ばしにしていた。それよりも目の前のもので忙しく、何かをそこにに入れると苦しくなる。

「しかし、そろそろやっておかないと」

作田は常にそう言った案件めいたものを溜め込んでいる。日常のちょっとしたこと、たとえば秋刀魚などを焼いたとき、それを乗せる長細い皿を買うとかだ。皿はあるのだが、秋刀魚は長い。大きな西洋皿はあるが、丸いため、お膳が狭くなる。細くていいのだ。秋刀魚ほどの細さでよい。しかし、これはなくてもそれほど困ることではないし、小さな皿でも、人に見せるわけではないので、秋刀魚がはみ出てもいいし、二つに切ってもいい。しかし、長いまま食べた方がサンマは美味しい。

しかし、そんな秋刀魚の皿を買うためだけに家を出るわけにはいかないで、何かのついでになる。大概はそんなことは忘れてるので、未だに買えないでいる。それで、困るわけでもなく、また秋刀魚を焼いて食べる機会など年に何回もない。ただ、秋刀魚ほど長くはない魚の場合にも、大きすぎる丸い西洋皿はやはり不満だ。巻き寿司は長いが、皿には盛らない。そのまま掴んで食べればいいが、これも切っていない巻き寿司を買うのは、年に一度だろう。

小さな話なら、それで済むが、大事なことで、まだスタートさえ切っていない案件が残っている。それをやるだけの意味はあるのだが、ネタが大きいので大層に思うのだろう。また、結構面倒で邪魔臭いことをしないといけない場合が多い。

「何とかならんか」

これは、やれば済むことなのだが、なかなか発火しない。

「発火、着火」

百円ライターも指で強く押すか回さないと発火しない。

「要はきっかけだな」

作田はそこに辿り着いた。

いろいろな案件は以前に思い付いたもの、決心したものだ。決めたものだ。さあ、やるぞと。しかし、ネタが古いので湿っており、火が付きにくくなっている。これは安全でいいのだが。

だから、今思うことが大事なのだ。今なら、二三日は賞味期限のようなものがあり、盛り上がりの中にある。これをすぐ経過させてしまうからお蔵入りになるのだ。

ただ、この今思う、というのは、ただの回想では駄目だ。今、本当にそれをやろうという気になっていないと。

「これは難しい」

考えるより、先に体を動かす。これが大事なのだが、その動くための発火が必要なのだ。

しかし、上手くいった例も作田にはある。長く抱えていた案件を、そういう過去から取り出すのではなく、今急に思い付くこともあるからだ。思い付けば火も付く。

それは何だったのかと考えると、今考えていることではなく、今、何気なく思ったことが火種になる。それは通り過ぎる自転車を見ていて、急に懸案になって いた事を思い出した。そして気持ちも同期した。それは、その自転車、坂道を上がっていた。辛いのか、降りて押していた。

「これなんだ」と作田は発火したのだ。案件の一つに、この坂道を登る楽な方法があったのではない。辛さだ。坂は人生には付きもので、自転車では坂は辛い。その解決策として、坂道を作らないことだ。それには地道な積み重ねで、坂にならないようにすべきだ。というものだった。

それで、作田は将来楽になるであろうと予測して、地道な作業を始めるべきだと、発火できたのだ。

ただ、その自転車、降りて押している。

「自転車に乗ったまま登ろうとするから辛いのだ。歩けばそれほどでもないだろう」

と、別のヒントを得てしまった。

結果、その地道な作業案件は、またお蔵入りになった。

了